

環境問題に対する新入女子学生の意識と行動

— 環境問題への関心の有無別検討 —

浅川富美雪・實成 文彦*

倉敷芸術科学大学教養学部

*香川医科大学医学部

(1999年9月30日 受理)

はじめに

環境問題が深刻さを増している中、問題を解決するための意欲、態度、行動力が私たちに求められている。そのため、UNESCO-UNEPは環境教育の充実を最も重要な課題として位置づけている¹⁾。

環境教育の目的は、環境問題に関心を持ち、環境に対する人間の責任と役割を理解し、環境保全に参加する態度および環境問題解決のための能力を育成することにあるとされる²⁾。わが国の学校教育においても、文部省は学習指導要領でこれまでも「環境教育」を取り上げ、その充実を図ってきている^{3,4)}。さらに、社会や地域において環境問題に関心を持ち、それに積極的に関わろうとする人材の育成が求められている⁵⁾。現在、大学の専門課程以外においても、環境教育科目が増加しつつある。しかしながら、その現状は客観的情勢に比してなお十分でないことが報告されている^{6,7)}。

このため、大学での環境教育の充実が課題となっているが、岡部⁸⁾らは義務教育期を中心とした感受性の豊かな時期における環境問題の実践的な体験は、大学での環境学習の動機づけになると考察している。したがって、新入学生がどの程度環境問題について、理解し、意識を持ち、行動しているかを知ることは、環境教育・学習のこれまでの評価とともに今後の示唆を得る上で意義が高いと思われる。

現在の環境問題は、私たち人間の生活・活動に端を発し、身近な環境問題が究極的には地球環境問題につながっていると認識できる。そこで今回は、将来、生活者としての実践の機会が多いと考えられる新入女子学生を対象に解析を行ったので報告する。

対象と方法

対象は1996年度A大学全新入女子学生148人およびB大学全新入女子学生55人の合計203人で、調査はそれぞれの授業（必修科目）時間にアンケート用紙を配布し、回答後、その場で回収する方法による。回収率はそれぞれ82%、95%であった。調査時期はA大学が1996年10月の初め、B大学が同年12月の初めであったが、いずれも環境関連の講義が始ま

る前であった。

調査票の質問項目の概略は、「環境問題への関心」「関心のある環境問題」「環境問題への対処に一番必要なこと」「環境問題を考えたときの将来の生活水準」「日頃心掛けていること」「エコマーク？（学生にはマークだけ示す）」「エコマーク商品を買う？」「参加したことがある環境を守る活動・行事」「環境問題をどこで学習してきた？」「家庭で環境問題が話題になる・なった？」となっている。

解析は、まず、「環境問題への関心」に対して両大学新入女子学生の間で回答に差のないことを確認し、次に「環境問題への関心の有無別」にクロス集計を行い、「環境問題への関心の有無」と“環境問題に対する意識と行動”の間の関連について検討した。統計的検討には、カテゴリデータに対しては χ^2 検定、数量データに対してはt検定を用いた。

結 果

「環境問題への関心」については表1に示すように、86%が“非常にある／ある”と答えている。しかし、大学間で差はなかった。そこで、環境問題に関心が“非常にある／ある”と答えたものを“関心ある群”，“あまりない／全くない”と答えたものを“関心ない群”として、以下検討を行った。「関心のある環境問題」（複数回答）については図1に示すように、関心ある群のほうが関心のある環境問題が多く、中でも“オゾン層の破壊（66%）”“ごみ問題（62%）”“大気汚染（57%）”“水質汚濁（56%）”“地球温暖化（54%）”“酸性雨（47%）”などに関心が高い。これに対し、関心ない群でも“オゾン層の破壊（57%）”“ごみ問題（37%）”については比較的関心があるものの，“大気汚染”“水質汚濁”“地球温暖化”“酸性雨”については14%、14%、14%、0%となっており、全般に関心のある環境問題は少ない。これを項目の選択数（関心のある環境問題の数／1人）でみると、関心ある群は平均5.5個、関心ない群は平均2.4個であり、有意な差が認められた（表6）。

表2に「環境問題への対処に一番必要なこと」について示すが、“ライフスタイルを見

表1 環境問題への関心

	環境問題に関心が				
	非常にある	あ	る	あまりない	全くない
全体 (n=174)	11.0% (n=19)	75.1% (n=130)	12.7% (n=22)	1.2% (n=2)	
A大学 (n=122)	9.9% (n=12)	76.0% (n=92)	12.4% (n=15)	1.7% (n=2)	
B大学 (n=52)	13.5% (n=7)	73.1% (n=38)	13.5% (n=7)	0.0% (n=0)	

注) 不明は除く

直す”が半数を占めており、両群間に差はなかった。表3に「環境問題を考えたときの将来の生活水準」について示すが、60%強は“今の水準を維持したい”と答えている。ただ、その中“無駄を省いて”が約半数あった。一方、“低下も我慢する”は30%足らずであるが、関心ない群では10%足らずとさらに少なかった。

図2に「日頃心掛けていること」(複数回答)を示す。“歯磨き時、水道を流しっぱなしにしない”“ごみ・タバコの投げ捨てをしない”が60~70%と多く、両群同様であった。一方、“フロンガス使用の商品は利用しないようにしている”は、関心ある群では40%強(第3位)と比較的多かったのに対し、関心ない群は10%足らずで少なかった。“使い捨て商品/缶飲料や使い捨ての容器飲料を利用しないようにしている”は両群とも低かった。これを項目の選択数(日頃心掛けていることの数/1人)で見ると、関心ある群は平均2.5個、関心ない群は平均1.9個であり、有意な差が認められた(表6)。次に、表4に示すように、「エコマーク(学生にはマークだけが示してある)」については70%が“見たこともあり、意味も知っている”と答えているが、関心ない群では50%足らずとやや少なくなった。一方、表5に示すように、「商品を買うとき」“エコマーク商品をいつも買う/できるだけ買うよう心掛けている”はほとんど無くて、63%は“とくに意識して買ってない”と答えているが、関心ない群では90%強がとくに意識して買ってなかった。図3に

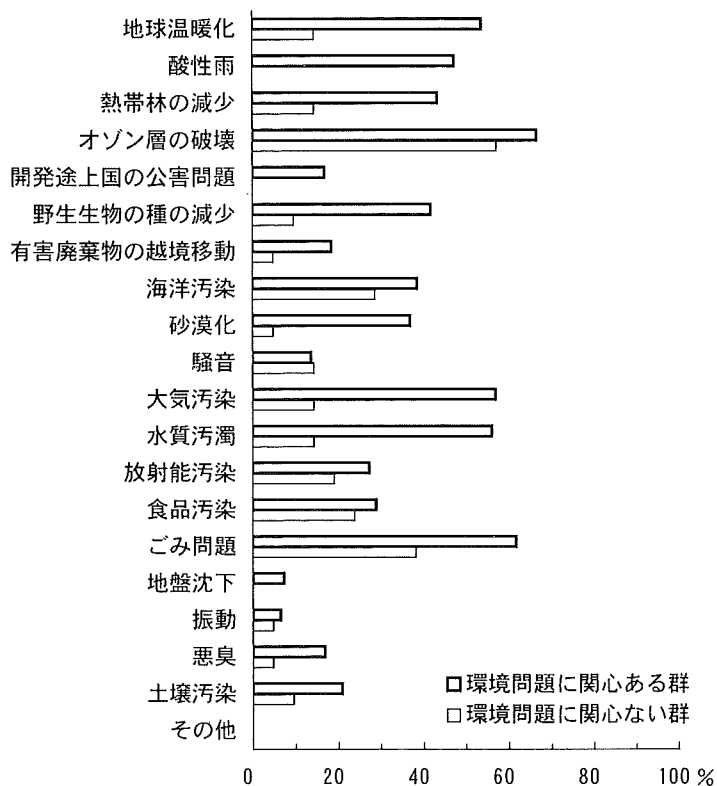


図1 関心のある環境問題(複数回答)

「参加したことがある環境を守る活動・行事」（複数回答）を示す。“ごみ拾いなどの清掃”が主であり、両群同様であった。次いで“リサイクル”の参加が多いが、関心ない群では関心ある群の約半数しか参加していなかった。これを項目の選択数（参加したことがある環境を守る活動・行事の数／1人）でみると、関心ある群は平均1.6個、関心ない群は平均1.1個であり、有意な差が認められた（表6）。

図4に「環境問題をどこで学習してきた？」を示すが、ほとんどが学校の授業と答えており、“中学校”が多かった。ただ、“家庭”“地域”が関心ない群ではどちらも0%なのに対し、関心ある群ではそれぞれ22%、6%認められた。これを項目の選択数（環境問題

表2 環境問題への対処に一番必要なこと（環境問題への関心の有無別検討）

	環境保全 技術の研究・開発	ライフス タイルを 見直す	規 制 を 強 化 す る	経済発展・ 開発を 抑制する	環境教育・ 学習を充 実させる	途上国の 公害対策・ 国際協力	その他
全体 (n=174)	17.5% (n=28)	50.6% (n=81)	5.0% (n=8)	5.0% (n=8)	11.9% (n=19)	8.1% (n=13)	1.9% (n=3)
関心ある群 (n=149)	16.9% (n=23)	50.0% (n=68)	5.1% (n=7)	4.4% (n=6)	12.5% (n=17)	8.8% (n=12)	2.2% (n=3)
関心ない群 (n=24)	21.7% (n=5)	56.5% (n=13)	4.3% (n=1)	4.3% (n=1)	8.7% (n=2)	4.3% (n=1)	0.0% (n=0)

注) 不明は除く

表3 環境問題を考えたときの将来の生活水準（環境問題への関心の有無別検討）

	今以上の生活 水準を望む	今の生活水準 は維持したい	無駄を省いて 今の生活水準	多少の生活水 準低下は我慢	かなりの生活 水準低下我慢
全体 (n=174)	7.2% (n=12)	30.1% (n=50)	36.1% (n=60)	22.3% (n=37)	4.2% (n=7)
関心ある群 (n=149)	7.7% (n=11)	26.8% (n=38)	35.9% (n=51)	24.6% (n=35)	4.9% (n=7)
関心ない群 (n=24)	4.3% (n=1)	47.8% (n=11)	39.1% (n=9)	8.7% (n=2)	0.0% (n=0)

注) 不明は除く

表4 エコマークについて一学生にはマークだけ示す（環境問題への関心の有無別検討）

	見たことはない	見たことはあるけど 意味は知らない	見たこともあり 意味も知っている
全体 (n=174)	2.9% (n=5)	27.7% (n=48)	69.4% (n=120)
関心ある群 (n=149)	2.7% (n=4)	24.8% (n=37)	72.5% (n=108)
関心ない群 (n=24)	4.3% (n=1)	47.8% (n=11)	47.8% (n=11)

注) 不明は除く

を学習してきた場所の数/1人) でみると、関心ある群は平均2.5個、関心ない群は平均2.1個であり、有意な差が認められた(表6)。表7に「家庭で環境問題が話題になる・なった?」を示す。全体に「家庭で話題になる・なった」は少ない中、関心ない群では「全くない・なかった」が33%と多いのに対し、関心ある群では8%と少なく、一方、「比較的話題にはでる・でた」が関心ない群では0%であるのに対し、関心ある群では30%とその割合が高くなっており、「家庭で環境問題が話題」に関して両群間で有意の差が認められた。このことは「環境問題への関心の有無」と「家庭での環境問題の話題の有無」との間に関連があることを示している。

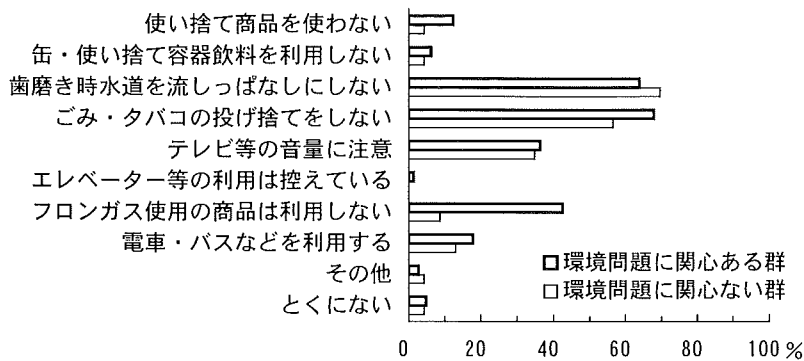


図2 日頃心掛けていること (複数回答)

表5 商品を買うときエコマーク商品を? (環境問題への関心の有無別検討)

	とくに意識して 買っていない	あれば買うが探し てまで買わない	できるだけ買うよ う心掛けている	いつも 買 う
全体 (n=174)	62.6% (n=109)	33.3% (n=58)	4.0% (n=7)	0.0% (n=0)
関心ある群 (n=149)	58.4% (n=87)	36.9% (n=55)	4.7% (n=7)	0.0% (n=0)
関心ない群 (n=24)	91.7% (n=22)	8.3% (n=2)	0.0% (n=0)	0.0% (n=0)

注) 不明は除く

表6 環境問題への関心と複数回答の項目選択数 (Mean±SD)

	環境問題に	
	関心ある群	関心ない群
関心のある環境問題**	5.5±4.1	2.4±2.0
日頃心掛けていること*	2.5±1.4	1.9±1.0
参加したことがある環境を守る活動・行事**	1.6±1.1	1.1±0.8
環境問題をどこで学習してきたか*	2.5±1.1	2.1±0.8

注) t 検定, *は p<0.05, **は p<0.01で有意 (不明は除く)

以上、調査の結果、新入女子学生の86%が環境問題に関心があると答えており、オゾン層の破壊やごみ問題、大気・水質汚染、地球温暖化、酸性雨等に対して関心が高く、こういった環境問題に対処するにはライフスタイルを見直すことが必要と考えていることがわかった。ただし、今の生活水準は維持したい（無駄を省くことは必要だけれども）とも考えている。このためか、実際の生活の仕方は、このような環境問題に対する意識・考え方とは乖離しているように見えた。しかし、環境問題への関心の有無別では、関心ある群のほうが環境問題に対して好ましい考え方や行動をしている割合が高く、関心ない群に比べ

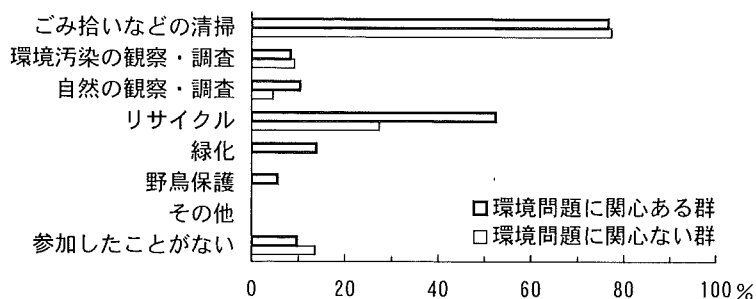


図3 参加したことがある環境を守る活動・行事（複数回答）

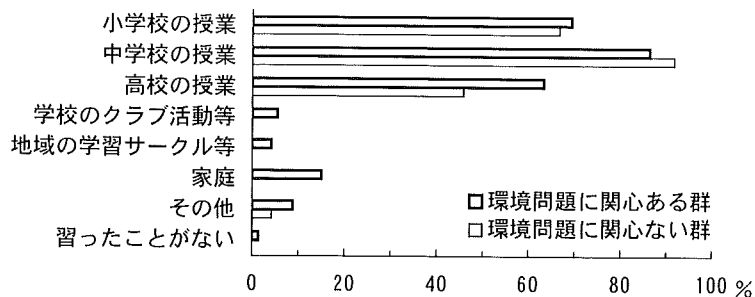


図4 どこで環境問題を学習してきたか（複数回答）

表7 家庭で環境問題が話題になる・なった？（環境問題への関心の有無別検討）

	いつも話題になる・なった	比較的話題には でる・でた	あまりない・ なかった	全くない・ なかった
全体 (n=174)	2.9% (n=5)	25.6% (n=44)	59.3% (n=102)	12.2% (n=21)
関心ある群 (n=149)	3.4% (n=5)	29.3% (n=43)	58.5% (n=86)	8.8% (n=13)
関心ない群 (n=24)	0.0% (n=0)	0.0% (n=0)	66.7% (n=16)	33.3% (n=8)

注) 群間の χ^2 検定, $p < 0.001$ で有意(不明は除く)

て意識と行動との乖離は小さいことがわかった。また、家庭で環境問題が話題になる・なった割合の高いこともわかった。

考 察

総理府の環境問題に関する世論調査^{9,10)}、あるいは新聞の世論調査¹¹⁾によれば、70～80%の人が“環境問題に関心がある”と答えているが、実際の生活を不便にしても環境を守る覚悟との間には開きがみられている。さらに、山田ら¹²⁾も大学生について、環境問題に対する意識が高いわりに生活レベルの実践が伴っていないことを報告している。いずれもわれわれの調査と同様、環境問題に対する意識・考え方と行動の間に乖離がみられており、このことは共通した課題と思われる。しかしその一方で、今回の調査において“環境問題に関心がある”と答えた群では、“関心がない”と答えた群より環境問題に対して好ましい考え方や行動をしている様子がうかがえた。これは、意識と実際の行動との間に開きはあるものの、意識と行動は相互に関連していることを示している。このことから、実際の行動に結びつけていくにはまず環境問題に関心を持つことがその第一歩であると考察できる。

調査から、これまでの環境問題の学習の場として学校の授業が大きなウエイトを占めていることがわかった。文部省は1989年の学習指導要領の改訂において、多くの教科、道徳、特別活動において環境教育にかかわる内容を重要視し、また、1991年には小学校や中学校・高等学校用に環境教育指導資料^{3,4)}を刊行するなど、環境教育の充実を図っている。一方、岡部ら⁸⁾は環境学習において、感受性の豊かな時期の実践的な体験の重要性に言及し、すべての人が学習する機会を有する義務教育での環境教育が重要であるとしている。いずれにしても、環境問題の学習の場として学校の授業が大きなウエイトを占めることは明らかであり、環境問題に対する好ましい考え方や行動を醸成していく上で、義務教育期を中心とした環境教育の一層の充実を図ることが必要と思われる。

その一方で、家庭や地域における環境学習・実践の必要性が示唆される。なぜなら、環境問題に関心がない群では「家庭で環境問題が話題？」は“全くない・なかった”が33%と多いのに対し、関心ある群では8%と少なく、一方、“比較的話題にはでる・でた”が関心ない群では0%であるのに対し、関心ある群では30%とその割合が高くなっており、「環境問題への関心の有無」と「家庭での環境問題の話題の有無」との間に関連があることが示されたからである。これに関して、山田ら¹²⁾は家族や友達と話し合ったことのある学生ほど地球にやさしい暮らしの工夫について知識があったと報告している。また、田尻ら¹³⁾は、社会に積極的にかかわろうとする親や環境保全の行動を実践する親は、子どもの環境意識形成に好ましい影響を及ぼし、その子どもは豊かな自然観を持ち、自然に親しむ行動をより多くとるようになることを考察している。将来、女子のほうが生活者としての実践の機会が多いことを思うと、環境教育における家庭の重要性がうかがわれる。さらに、小

澤¹⁴⁾は、環境教育は学校、家庭、地域が連携して実践されなければならないと述べている。

したがって、今回の調査から、学校での環境教育のみならず、家族ぐるみ・地域ぐるみでの環境学習ならびに実践が、子どもをはじめみんなの環境問題への関心を高め、それが好ましい態度・行動変容へと結びついていくと考察できる。そしてこのことは、生涯学習としての視点が環境教育には重要であることを示している。

環境問題が深刻さを増していく中、環境教育の重要性が高まっている^{1,15)}。わが国においても大学をはじめとする多くの高等教育機関で、理系・文系を問わず、環境教育科目が増加しつつあるが、客観的情勢に比してなお十分でない現状が報告されている^{6,7)}。社会や地域において環境問題に関心を持ち、それに積極的に関わろうとする人材の育成が求められている⁵⁾現在、今回の調査結果はそのための有用な知見となろう。

要 約

大学新生が、どの程度環境問題について理解し、意識を持ち、行動しているかを知ること、大学入学までの環境学習の評価とともに今後の大学教育における示唆を得る上で意義が高いと考え、環境問題に対するアンケート調査を行っているが、今回は、将来、生活者としての実践の機会が多いと考えられる新入女子学生を対象に解析を行った。

その結果、新入女子学生の86%が環境問題に関心があると答えており、オゾン層の破壊やごみ問題、大気・水質汚染、地球温暖化、酸性雨等に対して関心が高く、こういった環境問題に対処するにはライフスタイルを見直すことが必要と考えていることがわかった。ただし、今の生活水準は維持したい（無駄を省くことは必要だけでも）とも考えている。このためか、実際の生活の仕方は、このような環境問題に対する意識・考え方とは乖離しているように見えた。一方、環境問題への関心の有無別には、関心ある群のほうが関心ない群に比べて環境問題に対して好ましい考え方や行動をしている割合の高いこと、家庭で環境問題が話題になった割合の高いことがわかった。

以上、今回の調査から意識と実際の行動との間に開きはあるものの、意識と行動は相互に関連していることが示された。したがって、環境問題に対する好ましい考え方・態度を養うには、まず環境問題に関心を持つことが重要といえ、さらにそれを好ましい行動変容へと結びつけていくには、学校での環境教育のみならず、家族ぐるみ・地域ぐるみでの環境学習ならびに実践が、生涯学習としての視点が必要となろう。

文献

- 1) UNESCO-UNEP, "International Strategy for Action in the Field of Environmental Education and Training for the 1990 s", UNESCO-UNEP Congress Environmental Education and Training, Moscow, (1987).
- 2) 山極 隆: 環境教育の重要性. (沼田監修, 佐島編), 地球化時代の環境教育1 環境問題と環境教育, 106-110, 国土社, 東京, (1992).

- 3) 文部省：環境教育指導資料（小学校編），1-119，大蔵省印刷局，東京，(1991)。
- 4) 文部省：環境教育指導資料（中学校・高等学校編），1-121，大蔵省印刷局，東京，(1991)。
- 5) 田尻由美子，井村秀文：環境保全に対する住民の意識・行動の決定要因について，精華女子短期大学紀要，19：59-71 (1992)。
- 6) 新川加奈子，石川桂子，達橋美和子：高等教育における環境教育の課題，第7回環境情報科学論文集，110-115 (1994)。
- 7) 和田武：高等教育における環境教育の現状-大学環境教育研究会会員アンケート調査結果より-，環境教育，6：27-36 (1996)。
- 8) 岡部昭二，塚田蒼生子，三品広美：環境教育についての若干の考察-環境意識・実態調査の解析を通して-，環境教育，6，11-17 (1997)。
- 9) 総理府広報室：環境保全とくらし，月刊世論調査，27：2-39 (1995)。
- 10) 総理府広報室：地球温暖化問題，月刊世論調査，29：2-44 (1997)。
- 11) 朝日新聞社総合研究センター世論調査室：全国世論調査詳報，朝日総研レポート，127：114-130 (1997)。
- 12) 山田一裕，須藤隆一：大学生の環境問題に対する意識と環境に対するやさしい行動，環境教育，6：49-56 (1996)。
- 13) 田尻由美子，井村秀文：幼児の環境意識・態度形成に影響を及ぼす母親の生活行動に関する調査研究，環境教育，4：8-18 (1994)。
- 14) 小澤紀美子：生涯学習としての環境教育。(沼田監修，佐島，小澤編)，地球化時代の環境教育3 生涯学習としての環境教育，8-17，国土社，東京，(1992)。
- 15) 阿部治：環境教育の全体像，水環境学会誌，17：702-707 (1994)。

Awareness of Environmental Problems and Behavior in Female Freshmen in University

— Comparison Between Interest Group for Environmental Problems and No Interest Group —

Fumiyuki ASAKAWA, Fumihiko JITSUNARI*

College of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

**School of Medicine, Kagawa Medical University,*

1750-1 Ikenobe, Miki-cho, Kagawa 761-0793, Japan

(Received September 30, 1999)

A questionnaire study is conducted in university freshmen to evaluate their understanding, awareness, and behavior concerning environmental problems, which is believed to be useful in assessing environmental education before the college level and in improving college education. The present study investigated female university freshmen.

Most (86%) female university freshmen were interested in environmental problems. Many of them considered life style modification to be necessary to cope with environmental problems, but their actual behavior concerning the environment was often inconsistent with their understanding.

However, an interest group related to environmental problems in female university freshmen showed better understanding and behavior concerning environmental problems than a group of female university freshmen with no interest in such problems.

The importance of interest in environmental problems was shown for developing better understanding and behavior concerning environmental problems. The necessity of discipline and practice as environment-conscious individuals at home and in the community, as well as the importance of environmental education at school, were suggested as ways to develop better understanding and behavior concerning environmental problems.